

報 告

- 平成15年度森林総合研究所研究成果発表会開催
- 国際研究会「OAK2003, Japan」を開催
- ブランド・ニッポンを試食する会2003を開催
- つくば科学フェスティバル2003へ参加

○平成15年度森林総合研究所研究成果発表会を開催

平成15年度研究成果発表会を10月21日(火)午後、東京・内幸町の「イノホール」において開催しました。地球温暖化など地球環境問題を考えると、石油等の化石資源に代わるものとして木質資源の役割がますます重要になってきています。木材を有効に利用し、また再造林し、豊かな森林を永続的に維持していく循環型社会の構築が不可欠です。これらを実現するためには、現代の社会経済の中で成り立つ木材の合理的な利用技術や、将来に向けた新しい利用技術の開発が求められています。これらの課題への当所の取り組みを、最近の研究成果をもとに紹介しました。加工技術研究領域の黒田尚宏木材乾燥研究室長は、スギ材の乾燥技術について、新たに開発した原木の選別や、割れ抑制や急速乾燥技術などについての研究成果を発表しました。神谷文夫構造利用研究領域長は、木材住宅の耐震性向上のため、スギ、アカマツ、カラマツ等の国産針葉樹を使った厚さ24mm以上の厚物合板を張る床構造を東京・東北合板組合等と共同開発してきたことについて報告しました。細谷雄二成分利用研究領域長は、廃材や古紙等の木質系の産業物を化学的手法を用いて分解し、有用ケミカルスを製造する手法「加溶媒分解システム」(産業物中のセルロース成分を徹底的に分解し、レプリン酸に変換する点が特徴)を開発したことについて報告しました。



総合討論の様子

成分利用研究領域の眞柄謙吾木材化学研究室長は、木質バイオマスから石油を代替するエタノールを生産する新技術、水以外何も必要としない超臨界水処理法、及び木材を直接オゾンガスで処理するオゾン前処理酵素加水分解法を用いた木質バイオマスからのエタノール製造技術について紹介しました。特定の専門分野に特化した発表内容だったにもかかわらず、これらの問題に関心を持たれた行政、大学、民間会社等約300名の方々に参加いただき成功裡に終わることができました。また、会場入り口ホールにおいて、研究発表に関連した製品(実物)の展示コーナーや平成14年度の主要な研究成果をパネル紹介するコーナーを設けるなど、新しい試みにチャレンジしました。今後もこのような機会をとらえ、研究成果の普及と広報におもむきです。最後に、来年度の研究発表会の日程についてお知らせします。今年度と同じイノホールで10月19日(火)に行います。詳細については改めてお知らせ致します。



研究発表の様子

○国際研究会「OAK2003, Japan」を開催

平成15年9月29日～10月3日にかけて、森林総合研究所主催の国際研究会「OAK2003, Japan」が、つくば(つくば国際会議場)および栃木県日光市において開催されました。これはIUFRO(国際林業研究機関連合)のナラ・カシ類に関する遺伝および造林・生態部門の2つの研究部会の合同研究会として開催されたものです。初日の29日は、菊野喜八郎教授(京都大学)による基調講演に加え、R.ロジャース教授(米田ウィスコンシン大学)とJ.ロメロ・セバソン(米田ウィスコンシン大学)による講演が一般公開で行われました。研究会全体で30の口頭発表と28のポスター発表を通して、コナラ属樹木の生態的特徴や森林管理手法、さらに遺伝的多様性や遺伝マーカーを利用した森林の遺伝構造の解析などの最近の研究成果について活発な議論がなされました。



Rogers教授による招待講演



ポスターセッション

会議の終了後、現地見学として筑波山と日光に訪れました。筑波山では垂直分布にわたって推移する天然広葉樹林を、また日光では、日光千手ヶ原の保護林に設定された長期生態研究試験地の見学を行いました。これらの現地見学も含め、本研究会によって日本の豊かなナラ・カシ林の実態や研究の動向について認識を深めることができたとの声を多くの方からいただきました。両部会にとってアジアで初めて開催された研究会でしたが、大学、各試験研究機関、および民間企業などから、また日本を始め、韓国、アメリカ、フランス、オランダなど9ヶ国から80名を超える参加者を得て、無事終了することができました。開催にあたりご協力いただいた関係各位に厚くお礼申し上げます。



日光での現地見学会

特に、最近のDNA分子マーカー等を用いた遺伝解析手法の進展に伴い、従来では困難であった産地系統間の遺伝的相違や花粉や種子の飛散距離が測定できるようになり、遺伝的多様性の保全に配慮した産地区分や分配配置など、より具体的な技術開発の検討が可能となってきています。本研究会ではそのような最近の傾向を考慮して、ナラ・カシ林の生態系管理に直接貢献する課題を二つの研究分野の枠を超え同じ場で討議する合同セッションも試みられました。互いの分野における研究動向を理解するだけでなく、従来の研究分野を横断するような研究は今後ますます活発化するでしょう。このような動きが、森林資源として重要なナラ・カシ林の持続的管理に寄与することを期待するものです。

○ブランド・ニッポンを試食する会2003を開催

平成15年10月10日(金)、赤坂プリンスホテルにて「ブランド・ニッポンを試食する会2003-機能性に富んだ国産食材と消費者を結ぶ-」が開催されました。農業・生物系特定産業技術研究機構、水産総合研究センター、食品総合研究所、国際農林水産業研究センター、特定非営利活動法人日本エコノミー協会および当所が主催したもので、研究成果から生まれた機能性に富んだ国産食材を、赤坂プリンスホテル総料理長が素材を活かしたフランス料理に仕上げたもので、食や農に関係の深い方々から一般公募の消費者の方々まで約150名が集う昼食会となりました。森林関係からの食材はやはりキノコで、当所からは、コレステロールを下げるエリタデニンを多く含む「シイタケ」と、ビタミンDの含量が高い「ウスヒラタケ」を生産者の協力を得て提供しました。また、長野県林業総合センターから「ヤマブシタケ」を、三重県科学技術振興センターから「ハタケメンジ」を提供いただきました。正午に始まった会は午後二時近く盛会のうちに閉会となりました。



亀井農林水産大臣に提供きの説明する田中理事長



森林関係で食材として提供したきのこ

○つくば科学フェスティバル2003へ参加

第8回つくば科学フェスティバル2003が、10月11日(土)と12日(日)の両日、つくばカピオで開催されました。つくば市内内外の小・中・高校生を対象に、科学することの楽しさや大切さを理解し、科学への親しみを深めてもらうことを目的に、筑波研究学園都市内に所在の研究機関などが、それぞれのアイデアや企画を持ち寄って科学実験等を子供たちに体験させるイベントです。週末・日の2日間で開催され、延べ9,664人の来場者があり、非常に盛り上がった楽しい科学フェスティバルとなりました。当所は、開催第1回目から参加しており、今年は「シロアリの不思議・知恵の輪ならぬ知恵の木」をテーマに体験実験を企画しました。人の知恵の結集とも言える各種木組みの展示コーナーでは、木組みの構造的な不思議、実物やコンピュータグラフィックの立体画像で子供達に体験してもらいました。また、シロアリコーナーでは、ネバダシロアリ、イエシロアリ、ヤマトシロアリの生態や素を食い尽くす被害実験について勉強してもらいました。子供たちに大好評だったのは、シロアリをボールペンで自由自在に導き歩かせる実験コーナーでした。2日間で700名を超える子供たちが不思議の世界を体験し、同様のお父さん、お母さん子供同様に「エッ、どうして」と目が点になっていました。かつて無いほど大勢の方々がこの企画に参加し大盛況でした。



会場風景(中央が森林総研のブース)



木組みコーナー



シロアリコーナー



ボールペンの線上を歩くシロアリ